

不登校「居場所」利用2割

市、支援内容見直しへ

不登校となっている川崎市の児童生徒のうち、市の適応指導教室や市内の民間フリースペースなどの利用者は23・5%(2012年度)にとどまっていることが、市の調査でわかった。「子供たちに適したサービスを提供できていないからでは」と懸念する市は新年度から、市教育委員会と定期的に情報交換し、支援内容を見直していく方針だ。

(岩島佑希)

子供と
津区で
高津区
川崎市
(川崎
市高津
区)の
食卓を
取る
屋敷
を
取り
込み、
スタッフ
たち
が
「フ
リース
ペー
ス」

「いただきまーす」
節分の日の2月3日、川崎市高津区の「フリースペース」の食卓で、子供たちとスタッフが恵方巻きにかぶりついた。スタッフから「しゃべると運が逃げるよ」と言われたが、中学3年の女子生徒(14)は「お

おいしい」と満面の笑みで声を上げた。生徒はこで受

横浜、相模原でも低迷

利用率の低迷は横浜市や相模原市でも同様だ。両市とも民間のフリースペースなどに通う児童生徒数を把握していないが、市が設置する適応指導教室などの利用率は横浜市が12・2%、相模原市は13・6%にとどまっている。横浜市教委人権教育・児童生徒課は「民間施設を紹介する機会を増やし、子供たちのニーズに合った利用ができるよう支援していく」としている。

ほかにも、保護者が同じ悩みを共有できる場を充実させ、まずは親に元気を取り戻してもらう取り組みを充実させていく方針だ。

相模原市には市の適応指導教室などのほか、4か所のフリースペースがある。市立青少年相談センターは「教室の活動内容の充実を図り、利用率を上げたい」としている。

うだ。

ともに「居場所」を得たことで、気持ちの前向きに変わったという。運営するNPO法人「フリースペース

たまりば」理事長の西野博之さん(53)は「自分と同じ状況の人がいるし、チャレンジする機会と安心して失敗できる環境がある。自信回復につながる」と意義を強調する。えんには成人も含めて1日三十数人が通っており、多くの中学生が高校に進学しているという。

市によると、2012年度の不登校の児童生徒は小学生が210人、中学生が1010人の計1220人。市内には不登校の児童生徒向けに、学習支援をしたり、カウンセリングを行ったりする市の適応指導教室、相談指導学級のほか、

民間のフリースペースが計11か所ある。定員を設けているところもあるが、希望者は全員受け入れているという。

だが、利用者は287人とどまる。「なるべく遠い場所に通いたい」と、市外の施設を利用する子供もいるため、正確な実態把握は難しいが、市教委は「閉じこもりがちになっている子供も少なくない」と危機感を抱く。

ただ、不登校の子供たちが抱える悩みは、いじめや親子関係など多様かつ複雑で、効果的な支援ができていない可能性もあるという。このため、市人権・男女共同参画室の西山俊之担当課長は「支援の充実をしっかり」と検討していきたい」と話す。

